2023年7月2日（日）主日朝礼拝説教

『命のパン』　井上隆晶牧師
出エジプト16章12～21節、ヨハネ福音書6章48～59節

イエス様は荒れ野で五つのパンと二匹の魚を増やして5千人以上の人を満腹させました。人々は「この人はメシアだ。この人について行ったら食べ物を与えてくれる」と思ってガリラヤ湖を渡って反対側のカファルナウムの町にやってきて、会堂で教えておられたイエス様を見つけました。そこでイエス様は「朽ちるパンではなくて、朽ちないパンを求めなさい」と言われます。そして自分こそ天から降って来た命のパンだと説明されます。地上のパンを求めるのではなく、私を求めよ！というのです。これは今も昔も変わりありません。人間はキリスト本体を求めるのではなく、キリストがくれる物を求めようとします。又は、キリストの教えは学ぼうとしますが、キリストと一体になろうとしません。ここから「パンの話」が始まります。

❶【聖餐こそ、まことの食べ物であること】
50節に「**あなたたちの先祖は荒れ野でマンナを食べたが、死んでしまった。しかし、これは、天から降って来たパンであり、これを食べる者は死なない。**」と言われ、更に53節から54節にかけて「**人の子の肉を食べ、人の子の血を飲まなければ、あなたたちのうちに命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。**」（53節）と言われました。
イエス様の肉を食べ、その血を飲むというのは明らかに聖餐のパンとぶどう酒を意味しています。この聖餐のパンを食べ、ぶどう酒を飲まなければ命はないとはっきりと断言されます。聖餐を食べないと死ぬというのです。だから聖餐はまことの食べ物、まことの飲み物だと言われるのです。「まこと」という事は偽りの食べ物もあるという事です。それは「この世の食べ物」のことを意味しています。聖書がこれほどはっきりと聖餐が命であり、聖餐を食べなければ命はないと言っているのに、その聖餐をキリスト教徒がなぜ必死に求めないのかが、私には理解できません。プロテスタントはみ言葉を重んじ、カトリックは聖餐を重んじるという人がいますが、み言葉を重んじるなら、なぜこの言葉を重んじないのでしょう。
私の母教会では年に三回しか聖餐式がありませんでした。年に三回しか「まことの食べ物」を食べないのです。その他の362日は偽りの食べ物を食べていることになります。洗礼を受けていない人に聖餐を授けた牧師を裁いているグループの人たちがいます。彼らは「私たちは聖餐を重んじる。聖餐は私たちの命だ」といっていますが、月に一度だけしか食べません。コロナになると簡単にやめてしま

いました。本当に聖餐を命だと思っているのでしょうか。机の上の議論にしか思えません。初代教会では毎日聖餐式をしていました。「**彼らはパンを裂くことに熱心であった。**」（使徒２：42）「**毎日、ひたすら…家ごとに集まってパンを裂き**」（使徒 2：46）と書かれています。パン裂きとは聖餐式のことです。殉教する時も、聖餐を食べて死んでいったといいます。107 年にアンティオキアの殉教者イグナティウスは「一つのパンを裂くこと、これは不死の薬、死の解毒剤であって、イエス・キリストにある永遠の生命を与えるものである」と書いています。聖公会の司祭であったジョン・ウエスレーは毎日、聖餐をしていました。でも彼が始めたメソジスト教会は、聖餐を重んじません。マザー・テレサは「分かっても分からなくてもひたすら聖餐を食べ続けなさい」と言っています。それは聖餐が「まことの食べ物」だからです。幼児も認知症の人も、重度の障がい児も難しい説教は分かりませんが、聖餐は喜んでいただきます。幼児は食事をする時、それが何でできているか知りませんが、食べれば命を得ます。聖餐も同じです。

●アレキサンダー・シュメーマンはこんな意味の事を言っています。「聖書はその初めから食べ物の話で始まります。この世のすべてのものは神と交わるための人間への贈り物でした。しかし人間はこの世の物を目的として生きるようになり、神と交わらなくなりました。命である神から切り離されたこの世のものに命はありません。それは死を食べているのと同じです。」

「**人の子の肉を食べ、人の子の血を飲まなければ、あなたたちのうちに命はない。**」という言葉をしっかりと聞きましょう。

❷【人をつまずかせる聖餐】

「**ユダヤ人たちは、どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか、と互いに激しく議論し始めた。**」（52 節）とあります。そしてこの話を聞いて弟子たちの多くが「**実にひどい話だ。誰がこんな話を聞いていられようか。**」（60 節）と言って離れて行き、イエス様と共に歩まなくなりました。イエス様が「いやいや、パンとぶどう酒の事だよ、象徴としていっているのだ」と言えば、去らなかったでしょう。しかしそれを言わなかったのは、単なる象徴ではないからです。

初代教会では礼拝は一部と二部に分かれており、一部は聖書のお話であり、二部は聖餐式を行いました。一部は求道者でも誰でも参加できましたが、二部は信者だけでした。そして二部の礼拝の前に、「求道者はお帰り下さい」というアナウンスをしました。これをラテン語で「ミサ・エテエステ」といいます。そこから信者だけの礼拝を「ミサ」といわれるようになりました。ですから信者の礼拝とは聖餐式だったのです。ですからルカも「**週の初めの日、私たちがパンを裂くために集まっていると**」（使徒 20：7）と書いているのです。なぜ二部の前に求道者に帰ってもらったのかと言うと、信仰が無い人たちが聖餐を見た時「キリスト教徒は人の肉を食べている」と言ってつまずいたからです。初代教会では聖餐のパン

とぶどう酒を本当に「キリストの体、キリストの血」だと信じていたという事なのです。

●4 世紀のエルサレムのキュリロスは洗礼志願者への説教でこう言っています。「私たちは全き確信をもって、これをキリストの体と血としていただきます。パンの形のもとにあなたに与えられるのはキリストの体であり、葡萄酒の形のもとにあなたに与えられるのはキリストの血です。キリストの体と血をいただくことによって、あなたがキリストと共に一つの体、一つの血となるためです。…ですから、このパンと葡萄酒を、単なるパンと葡萄酒とみなしてはなりません。…あなたはこれらのことを教えられ、パンに見え、パンの味がしても、パンではなくキリストの体であり、葡萄酒に見え、葡萄酒の味がしても、葡萄酒ではなくキリストの血であることを確信しなさい。」

❸【聖餐によってキリストは私たちの内に住まわれる】

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもその人の内にいる。」(56 節) これこそ私たちの平安の秘訣です。聖餐によって、パンとぶどう酒の形でキリストが私の内に入って来られ、私と一体になります。こうして主は私の中に降り、私を天に引き上げられます。私と共にいて下さり、私と共にこの世を歩んで下さいます。私が主を抱きかかえているのではなく、主が私を抱きかかえ、私は主に背負われているのです。パンは小さいけれどもその本体は大きいからです。聖餐こそ、主が共にいて下さる最も分かり易い「しるし」です。聖餐を知らない人は自分の立派さに頼ろうとします。キリストが共にいさえすれば、私は死にません。キリストが去れば私は死ぬでしょう。

●逢坂元吉郎はこう言っています。「福音というのは非常に素朴なものであって、それは永遠の命、すなわちキリストの体を得た者は、不死の生命を持つことを教えるものである。しかも、それは単なる教えではない。もし教えであるに過ぎないならば、キリスト教以外にもたくさんある。福音は単なる教えではなく、やがて死んでゆくわたしの中に、もう一つのキリストを信じる身体があって、それは死なないことを体得することである。…主の体を食べ、食べるごとに主を覚えて深くなってゆくのである。」

4 世紀の聖アタナシウスは「キリストの体こそ、私たちの復活と救いの根である。」と言いました。**この根を持つ者と、持たない者は天と地の差があります。キリストという根は死なないからです。この世の物はすべて消えますが、この根は永遠に残り、この根と一体になった私たちは一度死んでも、やがて芽が出て来て、神の国で新しい死なない実を結ぶでしょう。キリスト教とは単なる学びではなく、創造だからです。これを思うと何と楽しいことでしょう。この根を植えつけてくださった主に感謝をしましょう。**